

指

江戸川乱歩

青空文庫

患者は手術の麻酔から醒めて私の顔を見た。

右手に厚ぼったく繃帯ほうたいが巻いてあったが、手首を切断されていることは、少しも知らない。

彼は名のあるピアニストだから、右手首がなくなっことは致命傷めいしょうであつた。犯人は彼の名声をねたむ同業者かもしれない。

彼は闇夜の道路で、行きずりの人に、鋭い刃物で右手首関節の上部から斬り落とされて、気を失つたのだ。

幸い私の病院の近くでの出来事だったので、彼は失神したまま、この病院に運びこまれ、私はできるだけの手当てをした。

「あ、君が世話をしてくれたのか。ありがとう……酔っぱらって

ね、暗い通りで、誰かわからないやつにやられた……右手だね。

指は大丈夫だろうか」

「大丈夫だよ。腕をちよつとやられたが、なに、じきに治るよ」

私は親友を落胆らくたんさせるに忍びず、もう少しよくなるまで、彼のピアニストとしての生涯が終わったことを、伏せておこうとした。

「指もかい。指も元の通り動くかい」

「大丈夫だよ」

私は逃げ出すように、ベッドをはなれて病室を出た。

付添いつきそいの看護婦にも、今しばらく、手首がなくなつたことは知らせないように、固くいいつけておいた。

それから二時間ほどして、私は彼の病室を見舞った。

患者はやや元気をとり戻していた。しかし、まだ自分の右手をあらためる力はない。手首のなくなったことは知らないでいる。

「痛むかい」

私は彼の上に顔を出して訊ねてみた。

「うん、よほど楽になった」

彼はそういつて、私の顔をじつと見た。そして、毛布の上に出していた左手の指を、ピアノを弾く恰好で動かさしはじめた。

「いいだろうか、右手の指を少し動かしても……新しい作曲をしたのでね、そいつを毎日一度やってみないと気がすまないんだ」

私はハツとしたが、咄嗟とっさに思いついて、患部を動かさないため

と見せかけながら、彼の 上じょうはく 膊の尺骨神経の個所を、指でお 圧お えた。そこを圧迫すると、指がなくても、あるような感覚を、脳の 中うちゅうすう 枢に伝えることができるからだ。

彼は毛布の上の左手の指を、気持よさそうに、しきりに動かし ていたが、

「ああ、右の指は大丈夫だね。よく動くよ」

と、つぶや 呟つぶや きながら、夢中になって、架空の曲を弾きつづけた。

私は見るにたえなかつた。看護婦に、患者の右腕の尺骨神経を 圧お さいお えているように、目顔でさしずしておいて、足音を盗んで病 室を出た。

そして手術室の前を通りかかると、一人の看護婦が、その部屋

の壁にとりつけた柵を見つめて、突っ立っているのが見えた。

彼女の様子は普通ではなかった。顔は青ざめ、眼は異様に大きくひらいて、柵にのせてある何かを凝視していた。

私は思わず手術室にはいつて、その柵を見た。そこには彼の手首をアルコール漬^づけにした大きなガラス瓶^{びん}が置いてあつた。

一目それを見ると、私は身動きができなくなった。

瓶のアルコールの中で、彼の手首が、いや、彼の五本の指が、白い蟹^{かに}の脚のように動いていた。

ピアノのキイを叩く調子で、しかし、実際の動きよりもずっと小さく、幼児のように、たよりなげに、しきりと動いていた。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第22巻 ペてん師と空気男」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年9月20日初版1刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第三巻」桃源社

1961（昭和36）年11月

初出：「ヒッチコック マガジン」宝石社

1960（昭和35）年1月

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：nami

校正：きゆうり

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

指

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>